死をかけて遺した安定多数

福田　一

六月を　奇麗な風の　吹くことよ　　子規

衆参同時選挙の陣頭で故大平正芳総理が壮烈な死を遂げたのは、去年の六月十二日のことであった。梅雨時のうっとうしい北陸路をかけめぐりながら、私は悲しみとうらはらにしきりに冒頭の句を思い出していた。故人の誠実な人柄と穏やかな風貌が、一層身近に感ぜられたからである。

昭和三十八年、池田内閣で大平氏が外務大臣、私は通産大臣として、中国むけのビニロンプラントの輸出問題で苦労していた頃のことである。ご存知のように当時は国交正常化のはるか以前であり、政府、与党内でも中国問題は慎重論が大勢を占めていた。たまたま閣議前の雑談の折に、大平氏が日本と中国とは「大晦日」と「元旦」のような関係ではないかと思う、と話しかけてきた。即妙な比喩だったので耳を傾けた私に、「同文同種というけれど、文化の捉え方や人間の生き方万般では類似点より相違点の方がはるかに多い。それだけに忍耐と努力をもって平和裡（原文ママ）に付き合わねばならない大切な隣国だと考える。ご苦労だが頑張ってほしい」と力強く激励されたことがあった。それから間もなく池田総理の決断で、私の在任中ビニロンプラントの輸出は実現した。いま宝山製鉄所を始め石油化学などのプラント建設が諸種の事情で足踏み状態になっていることと思い合わせて、感慨深いものがある。

大平氏を指して誠実な人柄を第一に挙げる人が圧倒的に多い。私もその一人である。昭和五十二年九月二十八日、日本赤軍によるダッカ空港のハイジャック事件が起きた。人質の全員解放を見届けたあと、法務大臣を辞任した私は、総裁公選管理委員

長として予備選挙の実施に当たることになった。久しぶりに党務に戻ったのである。そして大平氏は与野党伯仲の苦労の多い幹事長であった。やがては総理である福田赳夫氏と総裁の椅子を相争うことになる大平氏の心中は、真面目な人だけに苦しかったろうが、献身的に幹事長の職務を遂行していた。同じ党務にあった私には、その誠実な態度に強く心うたれるところがあった。

総裁選挙の管理委員長として福田、大平、中曽根、河本四候補の選挙ぶりを観察していた私の予測を今にして申せば、福田氏の一位、大平氏は二位と見ていたから、大平氏の一位には正直いって驚いた。私は自分の職務上、同志の議員や選挙区の親しい党員諸君にも私の判断をうかがわせる言動は注意ぶかく控えていたが、もし議員投票による決戦になれば大平氏を支持しようと心に誓っていた。

五十四年九月、大平氏は信を国民に問われた。結果ははかばかしくなく、かえって四十日余にわたった激烈な党内抗争を引き起こした。私は志を同じくする衆院議員六名と三名の参院議員の人々とともに、大平氏支持に終始して行動した。残念ながら党内抗争はやむことなくわずか七ヶ月で再び解散となり、参院の改選と合わせて同時選挙になった。総選挙の告知日が決まっても党内の対立はおさまらず分裂選挙の様相を濃くしていた。そんなある朝、私は瀬田の私邸に大平氏を訪ね、党の統一と団結のためスジを通した対処の必要を強く要請した。大平氏は私の訪問をたいそう喜ばれ、私が帰るとき玄関まで送ってくれた。これが生前の大平氏にあった最後だった。

大平氏はきたるべき時代を文化の時代と捉え、創意と英知に富む構想を抱いておられ、私もその史観に刮目し期待していた。昨年の同時選挙で得た自由民主党の安定は、氏が死をかけて問うた歴史の回答ではなかったかと思う。それにしても犠牲が大きかった。やはり六月は私にとって残酷な季節であったようだ。

（衆議院議長）